

---

# ヒルテンリートの鐘が鳴る

鈴一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒルテンリートの鐘が鳴る

### 【Nコード】

N4079Z

### 【作者名】

鈴一

### 【あらすじ】

貴族の青年、ナイアーツは留学していた友国から3年ぶりに祖国へ帰還する。

本来なら王都で大貴族の時期当主として励むはずが、とある理由から小さな町の領主となったナイアーツ。

その町は都会人から見れば辺境と言ってもいい場所だ。

王都から離れた小さな町の日常、そして時々  
の非日常。少々変わっているが心優しい青年と町民の、物語。

ほのぼの、ときどきシリアスなお話です。前半はシリアスに傾いてますが、進んでいくにつれほのぼのになる予定。

天才的な能力をもっていますがイメージは優秀とか秀才という言葉が合う感じの主人公。まったり更新です。

## 1：森の中の貴族（前書き）

読んでいただきありがとうございます。

最初はシリアス気味ですがのちにほのぼの系になる予定です。

## 1：森の中の貴族

深い森だ。

時刻は昼にさしかかった程度だろうか、真上にある太陽がその恵みの光を惜しげなく降り注ぎ、緑色の葉を風にゆらす木々は生命にあふれている。

深い森だといっても決して暗い雰囲気はない。それどころか家族連れのピクニックにちょうど良い場所だろう。

その森には街道が通っている。といっても王都から離れた地方なので綺麗に舗装されているわけではなくただ単に「道」があるだけだ。それでもその先に人の住む場所があるとわかるだけいいだろう。もっとひどいところに行けば獣道と変わらない。

石畳ではない、地面を整えただけの道を馬車が三台行く。

いや、厳密に言うと馬車ではない。ゆったりと歩を進めているのは地竜、つまりこれは竜車だ。

今はゆっくりと進んでいるが、最高速度、力や知能等どれをとっても馬を上回る。

調教は飛竜などに比べ断然たやすいがもともと個体数がそれほど多くない亜竜種である。

身分の高い　つまり王族や上位貴族くらいしか使用しない竜車がなぜ、こんな場所に。

道行く商人や旅人がみたらそう疑問に思っただろう。

関わり合いにならぬようにしたり、逆に近寄ってきたり。

すこし前まで走っていた街付近の街道ではそういう反応だった。だがここではそんなことはない。

なぜならまず、人が通らない。

先ほどから見ているものといったら小鳥や狐くらいだ。

「…うん。見事に何もないな。」

少し開けた竜車の窓から景色を見ていた青年は、若干感心すら滲ませて言った。

彩度の低いワインレッドの髪に、反するかのような水色の目が鮮やかだ。

顔立ちは凛々しく細微に整っており、気だるげに窓際に肘をかける姿でも隠しきれない気品がある。

それもそうだろう、彼はこの国で大貴族と呼ばれる家系の出身なのだから。

大貴族エインハルトの青年 ナイアーツ・エインハルトはため息をひとつついて視線を室内に戻した。

その動作でさえ優美に見える。

ひとつひとつの動きは生まれながらの高貴さと教育されつくした気品に溢れていた。

「森がありますぜー、若。」

前方の小窓から、御者をしていた男が顔をのぞかせて言う。

年齢は30代半ば。

獅子のような金茶の髪に、どこか悪戯めいた同色の瞳がナイアーツをみていた。

かろつじて整えたと言っているいいアゴヒゲを撫でている。

「他には？」

「小川とか。」

「他には？」

「空気。」

「目に見えるものが欲しいのだがな。」

「じゃあ俺の顔みといて下さいよ。」

茶化すように笑って言うその態度は主に対するものとは思えないが、青年は気にもとめず軽く肩を竦めて見せた。

「それこそ飽きたよ、グラン。」

主の言葉に男　グランディ・アルタはニヤニヤとした笑みを浮かべる。

「この男前を見飽きるとかそりゃないですけど。あ、じゃあちよっくら休憩します？ついでに数年ぶりに模擬戦でも。」

「お前相手に剣で模擬戦をしたら休憩にならないが。」

「暫く剣握ってなかったそうですね。これは俺が680勝目いたたきだな。」

「私はそんなに負けた覚えはないぞ。500対450といったところだろう。」

「そりゃもちろん俺が500勝のほうですよね？」

「冗談だろう？」

「よーしじゃあ今勝負して…」

「グランディ。」

今にも竜車を止めそうな勢いのグランディを遮ったのは、妙に迫力の込められた男の声。

声の主は、唯一ナイアーツと共に車に乗りその警護をしている黒髪の男だ。

冷たい灰色の目でギンツとグランディを睨み付けると怒りを堪えるようにゆっくりと口を開く。

「危険からお守りするのが我らの役目だ。わざわざ危険なことをしようとするな。それに、ナイアーツ様にその様な口の聞き方を…即あらためろ。」

はつきり言っただけでグランディの態度はナイアーツが幼いころから変わらずでありもはや日常化しているが、同じく幼いころから身辺警護しているこの専属の兵士は毎日の如くそれを正そうとする。

10年以上も前からである。

「相変わらず真面目だなー。眉間の皺ふえるぞ。」  
あっけらかんとした言葉。

それに、レジス・サーマインの口角がひくりとひきつるのを隣にいたナイアーツは見た。

「こ、の、大馬鹿野者！一体貴様はいつになったら学習するんだ！  
いまにも立ちそうな勢いで怒るレジスにグランディはへらへらかわしている。

「若がいいって言ってるからいいじゃん。」

「まあ、公の場で使わなければ構わない。」

「ナイアーツ様！」

「あまり暴れるなレジス。車の中だ。」

「う…も…申し訳ございません…。」

しよぼーんとするレジスをみて、ナイアーツは内心「犬に似てる」と思ったが言葉にはしないでおく。

「…ところで若、もうひとりくらい警護入れたかったんですけどねえ」

と、話の流れを切ってグランディが言う。

怒られていた者の態度ではない。レジスの眉間の皺がまた寄った。

反省はしてないだろうが、公の場などではむしろ完璧な態度をとるので問題はないとわかっている。

ナイアーツは苦笑してグランディを見やった。

「お前のことだから、女性を入れたいのだろう。女性を。」

「さっすが若！長旅で男ばかりじゃ嫌ですよ。後ろの車を守ってるやつらも全員男つしょ？潤いが！潤いが欲しい！」

後ろの竜車はほとんど人は乗っていない。必要な荷物と、御者、荷物を守る役目やナイアーツの世話をする者が数人いるだけだ。

とても貴族の連れとは思えない人数。グランディの発言に怒鳴りつけようとしたレジスを制する。

「遠回しにふざけていわなくとも言いたいことはわかるが。…いやまあお前のそれは半分本気だろうがな。共が少ないのは…仕方がないだろう？ お前とレジスを連れてこれただけでもいいほうだ。あまり屋敷から実力と信頼があるものを引き抜いていくのは不味い。…私はもうあそこには戻らないのだから。」

ぼつり、と付け足した言葉にレジスは怒りを消して沈痛な面持ちで押し黙る。

「選んでいただき光栄ですよ。」

逆に朗らかに笑ってみせたグランディだが、その目は怒りに満ちていた。

ナイアーツにはではなく、レジスにでもない。

その怒りの先を知っているナイアーツは苦笑を深めた。

彼は、再び外を見る。

相変わらずのうらかな陽気。

木々の間から見える青空を眺めながら、ことの始まりを思い返していた。

## 2：帰国の日

その日、友国である学術国家ルセネへ留学していたナイアーツは3年ぶりに祖国へと帰還した。

精霊の国アルトラクス。

大陸内でも大国に入るこの国は古きより精霊とのかかわりが大きい。初代国王の後は精霊であり、昔は国民のなかでも人の世にくだった精霊と結ばれる者が多くいた。

王が死んだ後、その後だった精霊はしばらく子孫たちを見守ったが、やがて何処かへ消えたという。

他の人の世にくだった精霊たちもいつしかいなくなり、いまでは肉体を得て現れる精霊はほとんど居ないといっている。

それでもこの国には、いや世界には様々な精霊が満ち溢れているのだ。

アルトラツカには精霊の血を継ぐ人々が残った。

それらはその血ゆえ高い魔力と寿命をもっている。

今はその血もだいぶ薄れ寿命に関しては見た目が若々しく平均より多少長生きという程度となっているが、王家や上流貴族の一部ではまだ色濃く残っている。

そのため歴代の王は長寿だ。

今の王はまだ40代。この先何十年も治世は続くだろう。

もしくは途中でその息子に譲るか、だ。

幼馴染でもある第一王子を思い浮かべて、ナイアーツは苦笑した。留学中も頻繁に手紙をやりとりしていたが、「暇だからはやくかえって来い」の一点張り。

帰ってきたとなると明日あたりには顔をみせなければ盛大にすねるだろう。

同じ22歳のはずだがあれば少し子供っぽい純粹なところがある。

子供っぽいといっても悪戯ばかりのガキ大将ではあるが。  
港から王都へと入ると、護衛が家の者に引き継がれる。  
竜車を降りたナイアーツは久々の王都に懐かしさを感じるとともに、  
何か違和感を感じた。

(…なんだろう。なにか胸騒ぎがする。)

きつと、長旅で疲れて神経質になっているのだ。

そう思った彼だが、3年ぶりに顔を見せた護衛のレジスを そのど  
こか緊張した顔見て不安な予感がただの勘違いではないと確信した。  
整えられた黒髪に、銀色の鎧がよく似合う彼は主の前に跪くとナイ  
アーツの許しを得て立ち上がる。

「お久しゅうございます。ナイアーツ様。」

「ああ、お前も変わらないようで安心した、レジス。…さて、前置  
きはいい。何があった？」

表情は緩やかなまま変わらず周りに聞こえないよう声を低めて訪ね  
れば、レジスがより表情を緊張させ言った。

「…申し訳ございません。ここでは…早急にお屋敷にお送りいたし  
ます。」

頷いてみせると、即座に部下に命令を飛ばすレジス。

目立たぬよう最小限でありながら腕の立つものをつれてきているら  
しい。

エルンハルト家の長男の護衛だ。腕の立つ護衛をつれてくるのは当  
たり前だが、何故こんなに少人数できたのだろうか。

目立ちたくないというように。

「…やれ、帰って早々とんでもないことになりそうだ。」

乗り換えた竜車のなかでナイアーツはゆっくりと目を閉じ、屋敷に  
つくまで言葉を発することはなかった。

「よく帰ってきた。ナイアーツ。立派になったものだ。」

「お久しぶりでございます父上。父上もお変わりないようで安心致しました。それにたった3年です、私はそう変わってはおりませんよ。」

屋敷に帰るなり玄関で出迎えた父、エインハルト公爵は厳格そうな顔を少し緩ませた。だがその眼にうかぶ緊張をナイアーツは見逃さなかった。

内心事態の大きさを感じながら、微笑を浮かべて対応する。

「そう硬い話し方をするな。いつも通りでいい。」

「わかりました父上。それで。」

「…ああ、わかつている。書斎のほうへ。」

「お前も、すでに何か察していると思うが。事件が起きた。」

父の書斎に通され、給仕が紅茶を用意し終わったのを見計らって重々しく口が開かれる。

「ええ、ただし市民には知られていないか、貴族内の事件ですね。」

街の様子は普段と変わらぬようでした。」

「ああ、市民には知られていない。…だがいずれ知らされる、いや知れ渡ってしまうだろう。」

エインハルトの現当主は、一度紅茶で唇を湿らせるとナイアーツを見据えて言った。

「……第一王子に…リュカイア殿下に毒が盛られた。」

声にするのも恐ろしい、というようにひそめられた言葉をきいて、青年は耳を疑った。

無意識に息をのむ。

今、父はなんと言った？

「そんな…まさか…リュカに？」

声がかすかに震えているのが自分でもわかった。その心のどこかで

「ああ、こんなにも取り乱したのは久々だ。」と、もう一人の自分が冷静にみている。

「慌てるな。幸い一命は取り留めた。だが当分は安心できないだろう。」

「そうですか…。」

肩の力が抜け、安堵の息をつく。

つい数日前にこれから帰国するという手紙を出したばかりだった。もちろん返事はもらっていない。それが最後の手紙になっていたらと思うと恐怖と犯人に対する怒りがこみ上げてくる。

「父上…。教えてください。犯人は何者ですか。」

彼には父がわざと犯人の正体を後回しにしているように思えた。まだ不明などではなく、すでに判明していて言わずにいるのだと。

事実父は、眉根を寄せ言葉を濁らせた。

「…落ち着いて聞け。…今回は個人のものではなく。ある貴族の一族ぐるみで行われた。すでに全員捕らえられている。」

「そうですね。リュカは第一王子。暗殺するのは並たやすいものではない、組織的な集団、それも内部の犯行か内通者がいると考えていいでしょうから。」

命に別状はなく、犯人も捕らえられたと聞いてひとまず安心だろう。本当に犯人が全員捕まったとわかるまで油断はできないが。

そう巡っていた思考は、父の次の一言で凍りついた。

「その一族は…サーズニル。そう、亡き妻…お前の母の一族だ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4079z/>

---

ヒルテンリートの鐘が鳴る

2011年12月14日20時51分発行